

まえがき

昭和五十四年（一九七九年）、母が九十四歳で亡くなった。その数年前、「腰折れ抄」という表題の和綴じの帳面を渡された。知人たちにあげたいのでそれを五、六冊ほどプリントしてほしいということであった。昔、母のある知人から聞いた話では、若いときに佐々木信綱に師事していたらしい。もちろん、知人も母も故人となり、確かめようもない。確かなのは、母は歌人と呼ばれたこともないし、そう自称したこともなかった。それでも、渡された二つ折りの三十枚ほどの和紙に万葉仮名でかなりの和歌が書いてあった。九十一歳で病床に臥すまでに詠んだ無数のものからの抜粋であった。ある知人にタイプ印刷を頼んだ。タイプストは解読が大変だったらしい。そのうちに母が帰天した。ある事情で英国に行くことになった。二年後、帰国した。行方を捜していたタイプストから印刷したものを渡さ

れた。和歌と俳句を混ぜて四百ほどが載っていた。五冊は適当な人に献呈し、原本を形見に持っている。それ以来、時々読む。母は晩年には俳句も習っていると聞いた。「腰折れ抄」には家族、交友、戦争、世相、自然などについての和歌と、終りの方に俳句が載っている。

小学生の頃から母とは一緒に住んでいなかった。時たま受け取る手紙は達筆であった。斜に目をとおして、なんとか解読できた。母と異なり、「みそひともじ」、などと聞くと、「味噌 仁母寺」のような味噌の商標かと思っていたほど、和歌も短歌も俳句にも無知であった。習ったこともなかった。それでも、和歌や短歌に漠然とした興味は持っていた。十代の終りから二十代の初めには、万葉集や百人一首など古典的なものを耳にしたことはあった。明治・大正・昭和初期の著名な幾人かの歌人や作家のものも聞いたり読んだりした。中でも感情移入をしたのは、石川啄木のもので

あった。それに西行法師の和歌をかなり読んだ。現在のものはほとんど読んだことがない。

二十代の後半から十年間は外国にいた。帰国してからは仕事が忙しく、そうした歌からは遠ざかっていた。四十代の中ごろ、母と度々会えるようになった。母が和歌や俳句を作っていることを知って、再び和歌や短歌に興味を持ち始めた。幾つか作ったが、日記は付けたこともないので、ノートしておくことはなかった。それでも、幾つかは母に見せたが、まあまあと言われただけである。気晴らしに字並べを شدしたのは七十近くになってからである。母からあっさりあしらわれたように、和歌とか短歌などと言う気は毛頭ない。季節・鳥・花・人の風情、世の風潮を見て、時には老いゆくわれに気がついて抱いた思いを三十一字ほどに組み立てるだけのことである。

今は、か・じ・んとかか・だ・んとかの語をしきりに耳にする。か・じ・んは佳人と思つた。そんな人はもうとつくにいない、いるのは薬漬けの美人もどきだ、と同年輩の友人に言われた。か・だ・んの方は、雑草ばかりの我が借家の狭い花壇を思わせた。申し訳ないほど頭が古いのである。それはともかく、新聞を見ると第一頁の「おりおりの歌」が目に入った。初めは興味を抱いて幾つかを読んでみたが、選評が複雑なので、若い時に知つたものを除いては、近づきがたい壇上歌に思われ、首の骨が折れそうに敬遠してしまつた。同じく新聞紙上びつしり選歌の並んだ歌壇は目くらましく、サンングラスをかけたくなつた。ましてや高価な歌集ともなれば手が出ない。いずれにしても縁遠い歌界である。

身近に感じたのは、教壇から一躍歌壇の新星と祭り上げられた若い女性のものであつた。二、三の引用を読んだだけだが、電車にぶら下がつた広告の言葉に似て近づきやすい歌である。そのうちに、現代の短歌とか俳句とかは一種の字並べではないかと思ふようになった。若き新星の明かりを受けたのかもしれない。これまでの字並べが勢いづいた。時たま、手抜きして十七字ぐらいでやめにしたこともある。字を並べるだけだから気楽である。腰折れでも気にしない。万が一、歌人や、歌神とも言うべき選者の目にとまつても、礼に失することはなからう。

歌壇をば花壇にまがふ野暮なれど字並べなれば歌は踏むまじ

こうして、仕事に疲れたとき、散歩の途上とか、特にある時期に毎月一度過疎地帯を小一時間電車に乗つていたときとか、他の旅行の機会にとか、頭を文字盤にして字を並べ続けた。それが、十年あまりになつた。そのうち、大方は、三、四年間のものである。近頃、ありあわせの紙片に書きな

ぐったものを集めて見てみると、ある年には毎日の様に字並べをしていたのである。その間は、他人様の書いたものの翻訳の仕事を忘れて、字並べ遊びに打ち込むことができた。字並べ三昧とは言え、高尚な境地ではなく、やたら字並べにすぎない。たまには幾つかのものを歌と呼ぶ人もいるが、歌人からうたたね好きの戯言と言われるよ、と答えている。

字並べもかなりの数になったので、まず、平成十七年の秋くらいまでのもので、散らばっているものをかき集め、だらしなのは外して、五〇〇ほど整理させてみた。その後、頭の中の文字盤が寂しくなったので、日記風に毎日字並べをやたら続けている。腰が折れても気にしない。杖の代わりになるからだ。字並べは脳の働きを多少整え、知能の若返りに役立つようだ。おかげさまで気は若い。

顧みれば、わが人生の間でごく短期間の字並べ三昧である。齢はいつ死んでもおかしくないまでに進んでいる。ここらで、息を引き取る前の最後の字並べを前もって行っておこう。

某年某日 字並べのできぬ最期となりぬれば

吹く風のまにまに生きてはや八十路つと振り向けば枯葉のみ舞う

平成十七年

目次

まえがき 1

一 四季おりおり 平成四年～平成十七年 9

二 花 72

三 鳥 76

四 人 81

五 雑感 85

六 老い 89

七 老いの見納め センチメンタル ジャーニー 96

 平成九年五月関西旅行 96 平成九年九月ベルギー・フランス旅行 98

 平成十年五月関西旅行 101 平成十五年十月関西旅行 103

 平成十六年十月関西旅行 106 平成十七年二月所用で東京 108

あとがき 110

一 四季おりおり

平成四～七年

十二月一日

今しばし枝に住みたまもみじ葉の悲願をむげに木枯らしは吹く
山並みのかとなく低くなりゆきて冬は田野をかけめぐる

師走にもまだ散りやらぬもみじ葉は冷たき雨後に咲く花のごと

十二月二日

モミの木に黄色い花と思いきや舗道を嫌うイチヨウの葉かな

姫椿雪待ち顔に華やげり

十二月九日

初雪や赤きもみじに綿帽子

燃えやまぬ紅葉惜しむや初雪は日の出とともに消え去りにけり

十二月十日

冬枯れてすけゆく庭の一隅にはじらうごとく山茶花の映ゆ

十二月十六日

時知らず咲いた桜の木の陰に見る人もなき冬枯れの園

十二月十八日

冬枯れに何を待つやら柿の葉の寄り添う群れに風は冷たし

十二月二十日 車中にて

温かき電車の窓に枯野原冬日を浴びて春ともまがう

鉄橋にかかればのぞく雪山の見えて嬉しき冬の旅かな

十二月二十二日

電線にずたずた切れ雪山の日ごとに映える冬の道かな

初雪の溶けてきらめく水玉に降誕祭の近きを思う

十二月二十三日

あな嬉し願いたがわずこの時にクリスマス・ローズ咲きにけるかな

十二月二十四日

雪ならず虹のかかれるクリスマスよきことありとしばし夢見る

思いきや降誕祭に虹の橋

降誕の賑わい避けし寂しさも雪の降り来ていつか消えゆく

一月二日

元旦や唯一めでたき盃は束の間なれど車減りしこと

一月三日 除夜の鐘の鐘餅をもらって

鐘餅をもらってあけし幾年か金持ちならず除夜を迎える

鐘餅はめでたきなれど年毎にふところさびし除夜の鐘かな

一月四日

初春も三日過ぎればただの冬冷たき雨のそぞろ降りけり

一月五日

年越してなおも咲きいる野菊にぞこのあらたまをことほぎてこそ
門松や世捨人とは思えどもなにやかやと外出多かり

一月六日

初春や広場に子らの姿なく羽根独楽飛ばぬ世とはなりけり

一月七日

姫椿雪見ぬままに年越してそぼ降る雨にきばみゆくかな

一月九日

羽ばたきにそよ風立ちぬ梅が枝を春の気配としばし覚えり

一月十一日

あらたまの月にゆかしや松枝は夜明けの雪に薄く装えり

一月十三日

陽を西に月を東に舞うとびは下界のわれをいかに見るらん

一月十五日

どんと祭暦ばかりの正月は焼く松もなくさらり過ぎけり
スーパ―でふと目にとめし水仙を妻に買い来る雪の降る道

一月十六日

雪化粧ほほえみ競う寒椿あどけなくしてだれか手折らん

一月十九日

年波に荒れたままにし内庭をゆかしく覆う今朝の雪かな

一月二十八日

移りげな陽射しとらえて寒椿こぼるるばかり笑みを湛える

二月五日

雪降りてあな嬉しき銀世界ビニール空き缶白布に覆わる

二月十日

松枝のしなうばかりの朝なれど昼には消えし春の雪かな

二月十六日

昨夕は春の気配に梅白く明けて雪降る笹の白さよ

昨日は梅も陽気にほころべど今朝は雪降るうたかたの春

二月二十五日

山白く風は冷たき日なれどもおぼろに匂う春の気配ぞ

二月二十八日

暖冬にとまどう早芽のチューリップ

平成四〇七年十二月〇三月〇五月

三月四日

かれなずむ立ち木ふくらみ春近し

三月十日

雪解けの小庭の隅に幼梅一つ二つと咲くもいじらし

春雪のひける黒地に幼梅一つ二つとはじき咲きけり

三月十八日

雪かむり消え入りそなた梅の花

三月二十五日

あちこちに梅は咲けどもにおいなき春は病におかされしかも

三月二十七日

風邪ごもり終わって歩けばあちこちに梅の紅白咲きいでいたり

四月一日

満開の梅をはるかに山々は雲にけむりて春とも思えじ

四月三日

花吹雪舞うやと思いよく見れば雪の降り来る春寒の朝

四月十三日

花冷えの雨に打たれて咲きなやむ花の色香のいとおしくあり

花冷えにそぞろ歩けば咲きなやむソメイヨシノあやにうるわし